

2001年6月3日

エリと息子たち一腐敗墮落を生んだ世襲制

【聖書】サムエル記上2章12～36節

2:12 エリの息子はならず者で、主を知ろうとしなかった。2:13 この祭司たちは、人々に対して次のように行った。だれかがいけにえをささげていると、その肉を煮ている間に、祭司の下働きが三つまたの肉刺しを手にとり、2:14 釜や鍋であれ、鉢や皿であれ、そこに突き入れた。肉刺しが突き上げたものはすべて、祭司のものとした。彼らは、シロに詣でるイスラエルの人々すべてに対して、このように行った。2:15 そればかりでなく、人々が供え物の脂肪を燃やして煙にする前に、祭司の下働きがやって来て、いけにえをささげる人に言った。「祭司様のために焼く肉をよこしなさい。祭司は煮た肉は受け取らない。生でなければならない。」2:16 「いつものように脂肪をすっかり燃やして煙になってから、あなたの思いどおりに取ってください」と言っても、下働きは、「今、よこしなさい。さもなければ力づくで取る」と答えるのであった。2:17 この下働きたちの罪は主に対する甚だ大きな罪であった。この人々が主への供え物を軽んじたからである。2:18 サムエルは、亜麻布のエフォドを着て、下働きとして主の御前に仕えていた。2:19 母は彼のために小さな上着を縫い、毎年、夫と一緒に年ごとのいけにえをささげに上って来るとき、それを届けた。2:20 エリはエルカナとその妻を祝福し、「主に願って得たこの子の代わりに、主があなたにこの妻による子供を授けてくださいますように」と言った。こうして彼らは家に帰った。2:21 主がハンナを顧みられたので、ハンナは身ごもり、息子を三人と娘を二人産んだ。少年サムエルは主のもとで成長した。2:22 エリは非常に年老いていた。息子たちがイスラエルの人々すべてに対して行っていることの一部始終、それに、臨在の幕屋の入り口で仕えている女たちとたびたび床を共にしていることも耳にして、2:23 彼らを諭した。「なぜそのようなことをするのか。わたしはこの民のすべての者から、お前たちについて悪い噂を聞かされている。2:24 息子らよ、それはいけない。主の民が触れ回り、わたしの耳にも入ったうわさはよくない。2:25 人が人に罪を犯しても、神が間に立ってくださる。だが、人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう。」しかし、彼らは父の声に耳を貸そうとしなかった。主は彼らの命を絶とうとしておられた。2:26 一方、少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった。2:27 神の人がエリのもとに来て告げた。「主はこう言われる。あなたの先祖がエジプトでファラオの家に服従していたとき、わたしは自らをあなたの先祖に明らかに示し、2:28 わたしのためにイスラエルの全部族の中からあなたの先祖を選んで祭司とし、わたしの祭壇に上って香をたかせ、エフォドを着せてわたしの前に立たせた。また、わたしはあなたの先祖の家に、イスラエルの子らが燃やして主にささげる物をすべて与えた。

2:29 あなたはなぜ、わたしが命じたいけにえと献げ物をわたしの住む所でないがしろにするのか。なぜ、自分の息子をわたしよりも大事にして、わたしの民イスラエルが供えるすべての献げ物の中から最上のものを取って、自分たちの私腹を肥やすのか。

2:30 それゆえ、イスラエルの神、主は言われる。わたしは確かに、あなたの家とあなたの先祖の家はとこしえにわたしの前に歩む、と約束した。主は言われる。だが、今は決してそうはさせない。わたしを重んずる者をわたしは重んじ、わたしを侮る者をわたしは軽んずる。2:31 あなたの家に長命の者がいなくなるように、わたしがあなたの腕とあなたの先祖の家の腕を切り落とす日が来る。2:32 あなたは、わたしの住む所がイスラエルに与える幸いをすべて敵視するようになる。あなたの家には永久に長命の者はいなくなる。2:33 わたしは、あなたの家の一人だけは、わたしの祭壇から断ち切らないで置く。それはあなたの目をくらまし、命を尽きさせるためだ。あなたの家の男子がどれほど多くとも皆、壮年のうちに死ぬ。2:34 あなたの二人の息子ホフニとピネハスの身に起こることが、あなたにとってそのしるしとなる。二人は同じ日に死ぬ。2:35 わたしはわたしの心、わたしの望みのままに事を行う忠実な祭司を立て、彼の家を確かなものとしよう。彼は生涯、わたしが油を注いだ者の前を歩む。2:36 あなたの家の生き残った者は皆、彼のもとに来て身がかがめ、銀一枚、パン一切れを乞い、『一切れのパンでも食べられるように、祭司の仕事の一つに就かせてください』と言うであろう。」

【序】悲劇の原因

ハンナの涙の祈りは聞かれました。サムエルを授かったのです。彼女は乳離れするまで丹精こめて育てると、彼を祭司エリのもとに連れて行きました。そして神さまとの約束通りに、「この子を一生神さまにお貸しします」と言って、エリに託したのでした。

エリは40年間、シロの神殿の祭司という、イスラエルの精神的指導者の立場にいた人でしたが、98才の時に悲劇的な死をとげます。ペリシテ軍との大決戦にイスラエルが負けて、神の箱を奪われ、同時に二人の息子も死に、その知らせを聞いて、彼は祭司の席から仰向けに落ち、首を折って死んだのでした。

祭司としてお仕えしてきた神の箱を奪われてしまうとは、大失態です。どうしてそのようなことが起こったのでしょうか。それはエリの二人の息子が「ならず者」(2:12)だったからなのです。今日はサムエル記の第二回、エリと息子たちについて学びます。

[1] 礼拝を壊している祭司

エリの二人の息子たちホフニとピネハスは父と同じ祭司でした。祭司は幕屋や神殿に安置されている「神の箱」の尊厳が損なわれないように守ること、礼拝に来る人々を助けて律法にかなった礼拝を捧げるように導くこと、律法を教えまた神さまの御心をたずね明らかにすることなどでした。

この職務はアロンの家の者が父から子、孫へと受け継いでいく世襲制でした。ですから彼らは他の部族のように土地の配分を受けず、礼拝者が捧げるささげ物の一部を生活の糧としていただくことが定められていました。祭司はささげ物の一部をいただくことによって、自分たちの勤めの尊さと大切さをいつも自覚しながら、礼拝に仕えていくことが、期待されていたのです。

この祭司に相当する務めが教会の牧師でしょう。では牧師の生活はどのようにして営まれているのでしょうか。三つのタイプに分けられます。国から給料を受けて職務に当たっている牧師、これは宗教税を徴収している国の公認された教会(国教会:例えばイギリスのアングリカンチャーチ、ドイツのルーテルチャーチ等)の教職者です。次に信者の献金によって活動している教会(国家から分離独立している自由教会)の会計から給料を支給されている牧師、そのほかに自分で生活費の一切をまかなっている牧師がいます。

日本、シンガポール、アメリカ等の教会はみな自由教会ですから、牧師やスタッフは教会員の献金から給料をいただいています。献金が十分でないので給料も少ない場合は、不足分を補うみで働く人もいます。私も皆さんの尊い献金の中から給料をいただいています。まだ小さな群れなので、家賃や健康保険などは日本からの献金で補われています。人数が増えると、教会予算も大きくなり、さまざまな必要に応える牧師スタッフを自分たちの力だけで支えていけるようになるでしょう。

私は牧師として立つように神さまから召しを受け、その準備をして神学校に入学し、6年間の訓練を受けて牧師になりました。以来39年間、私は信者の皆さんが、祈りを込めて捧げる献金によって生活を支えて頂いて生きてきました。そしてそのことを、この上もない光栄とおもって感謝しています。私たち夫婦は、皆さんひとり一人の生活が祝福に満ち溢れるようにと真剣に祈りながら教会の御用に当たっています。皆さんの信仰と愛に包まれて生活することで、神さまの憐れみと愛に包まれている恵みを毎日覚えて生活できるとは、何と有難いことでしょう。

ところがエリの息子たちには、このような感謝と畏れが見られません。彼らは礼拝者が定めに従って、いけにえを釜や鍋で煮ていると、下働きの者に三つ又の肉刺しを突き入れさせ、突き刺したものはすべて自分の物にしました。いけにえの動物の内臓を覆う脂肪は、祭壇の上で燃やし尽くして

宥めの香りとしなければいけないのに、「焼かずによこせ。さもないと力づくで取る。」と乱暴を働きました。

祭司は、人々が捧げる礼拝が神さまに喜ばれ、祝福を豊かに頂けるようになるために仕える者です。ところが彼らは逆に、礼拝をぶち壊しています。これは礼拝する人たちの期待に反しているばかりか、神さまにたいする大きな罪です。その上彼らは、幕屋の入り口で仕えている女性と姦淫の罪も犯しています。

この悪い評判を聞かされて、エリもさすがに黙っていられなくなりました。「なぜそのようなことをするのだ。——息子らよ、それはいけない。——人が人に罪を犯しても、神が間に立ってくださる。だが、人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう」。人が神さまに対して罪を犯した時、必死になって執り成しをするのが祭司です。祭司が清くなくてどうして執り成せるでしょうか。

しかし息子たちは、年老いた父親の言葉に耳を貸そうとはしませんでした。神さまは、「神の人」と呼ぶ使者をエリの許にお遣わしになりました。「あなたはなぜ、私が命じたいけにえと献げ物をわたしの住む所でないがしろにするのか。なぜ、自分の息子をわたしよりも大事にして、わたしの民イスラエルが供えるすべての献げ物の中から最上のもを取って、自分たちの私腹を肥やすのか。——あなたの家には永久に長命の者はいなくなる。——あなたの二人の息子ホフニとピネハスは同じ日に死ぬ」。

神さまの警告は当然すぎるものでした。でも神さまはこの裁きを直ぐ実行されませんでした。次の3章でサムエルを通してさらにエリに伝え、4章になってとうとう実行なされたのでした。エリもホフニ、ピネハスも、神さまが待って下さっている間に、悔い改めるべきでした。

[2] 召された者の喜びと感謝

神の人の警告に「あなたの先祖を選んで祭司とし」とか「あなたの先祖の家」という言葉が繰り返されています。これはエリの家先祖が神さまの特別の選びによって、祭司に選ばれたことを示しています。祭司の務めが誰にでもすぐ勤まるものではなく、毎日の生活を通して親から子、孫へと継がれ、整えられていくものだから、世襲の方が良いとされたのでしょう。

ところが父から子、孫へと自動的に受け継がれていくうちに、特別に選ばれたという恵みが、当たり前のことになり、自覚の全く欠けた祭司が生まれるようになったのです。ここに世襲制の落とし穴があります。そうならないように、エリは二人の息子たちを小さい時からよくよく訓練すべきでした。

エリはそのように心がけて息子たちを育てた積もりかもしれませんが、自分の後姿を見て育ててくれたと思ったのかも知れません。でもその期待はずれました。親は我が子が当然こう感じ、こう考えると思います。ところが子は全く違うのです。親と子は全く別人格なのだということは、親にとって分かっているようでいて案外分かっていない場合が多いようです。殊に親の仕事を継ぐということは、

子供にとって容易なことではないようです。

私は両親ともクリスチャンではありませんでしたから、教会や信仰について全てが実に新鮮でした。ビジネスマンの父は3人の息子がそれぞれ事業家になってほしいと思っていたようです。ですから私が牧師になると宣言したら、とても落胆しました。

でも私は神さまが牧師に召してくださったことを、今でも心の底から感謝しています。こんなに生き甲斐のある人生は他にはない、どうして皆さんは牧師にならないのだろうと不思議でなりません。父ですら晩年になって、君が一番良い人生を選んだと言ってくれました。そして次男の私の家で死んでくれました。

ところが私の子供たちにとっては違うようです。長男が牧師になりました。勿論私の顔を立てるために牧師になったのではないでしょう。あくまでも彼なりに祈り、神さまに召されたという確信に立って、中学校の教師を辞めて神学校に入ったものと信じます。ところが他の4人は、牧師が一人出たのだからこれで子供のノルマは果たせたとか言って、ホッとしているようです。

先月九州に行った時、別府に加藤さん夫妻を訪ねました。札幌時代に教会の役員として若い私を真実に支えてくださいました。銀行員でしたが、幼稚園を学校法人化して建物を新しく建てかえるに当たって、専務理事になってくださいとお願いしました。そして定年前に大銀行を辞めて、ろくな給料も出せないところに来て頂きました。

彼は7年がかりで建築工事と法人化を成し終えたばかりか、幼稚園の保育にとってもよい特色を付け加えてくれました。それから、病弱な奥さんのために、暖かい別府に温泉付き老人ホームを買って引退生活に入りました。はじめは別府伝道所の役員をしていましたが、牧師になって教会を始めのように神さまの導きをうけ、現在別府キリスト福音万民教会の牧師になっておられます。

久しぶりにお目にかかりましたが、髪の毛が復活し、肌がつやつやして輝いています。奥さんも元気に教会を支えています。お金も時間も心も体も一番良い使いかたをして最上の晩年を過しておられました。本当に良かったと、嬉しくて仕方がありませんでした。やはり牧師になるのが最上です。

ところが、ホフニとピネハスには、このような喜び、感謝が見られません。人々が丹精こめて用意し、神さまに捧げて礼拝しようとしている捧げ物の最上の部分を、自分が食べようとしています。最上の物は神さまに捧げるべきなのに、自分の物にしてしまうとは、神さまを自分より軽く扱っています。神さまに対する畏れが全く欠けています。

こんな祭司は祭司に値しません。辞めさせるべきです。ところがエリはそうしていません。こんなならず者でも、我が子である以上、祭司を継がせなければと思い込んでいたのでしょう。これでは、

「神さまよりも息子を大事にしている」と言われても仕方ありません。自己革新を忘れた制度は腐敗墮落を生み出していきます。今までずっとこうして来たのだからという思いに縛られて自由な発想が出来ない。これは昔も今も変わりません。

[結] 恵みを感謝して受ける信仰を

皆さんは今の自分の立場や勤めを、神さまから選ばれて私に与えられた恵みだと受け取っておられますか。それともホフニやピネハスのように、なんの感動も喜びも使命感もなしに、やらされているのでしょうか。

ホフニとピネハスは祭司の家庭に育ちながら、神さまを礼拝する喜びをどうして受け継がなかったのでしょうか。私も自分の子供たち、孫たちに対して、礼拝する喜びを受け継がせることが出来なかったエリと、同じではないかと心もとない思いになる時があります。

でも私たち夫婦はシンガポール国際日本語教会の牧師として立たされていることを、心から感謝しています。光榮に思っています。この喜びをもって生き活きと毎日過せていることを、我が子たちに伝え続けていきます。皆さん方にもお伝えしていきます。

神さまの恵みにたいする感謝が欠けますと、特別な恵みが単なる権利になってしまいます。そして「私腹を肥やしている」といわれる生き方に流されていきます。あるいは父の論しや人の批判を聞き入れない独善的な人間になってしまいます。

神さまを心から礼拝する信仰を私たちが先ずしっかりと身に付けていきたいものです。そして礼拝の喜びを、我が子やまわりの方がたにも証していきましょう。

不思議なことに、我が子に信仰を受け継がせることに失敗したエリが、ハンナから預かったサムエルを立派に育てることが出来ました。失敗親父でも神さまはお用いになるのです。次回17日の父の日礼拝にはその点を学びます。